

長期化するコロナ禍から社会を立て直すための鍵となる「グリーンリカバリー」。これまでの経済活動への回帰ではなく、地球温暖化をはじめ、より環境に配慮した形で経済を立て直そうとする考え方が世界的に注目されている。その具体的な施策の一端を中国山地の山懐に抱かれた小さな村に見出すことができる。

“百年の森林構想”を基軸とし、林業、再生可能エネルギー、ローカルベンチャーなど多彩な事業を展開し、地域再生に取り組んでいる西粟倉村である。

西粟倉村

岡山県

も り 森林が 未来を創る

～“生きるを楽しむ” むらづくり～

岡山県西粟倉村

も り 森 林 が 未 来 を 創 る

西栗倉村 人口1,377人、世帯数598戸（令和4年10月現在）

村域の大半は美作市と接し、中国山地を介して北は鳥取県智頭町、東の一部を兵庫県宍粟市と接する岡山県最東北端の村。東西9km、南北13.5kmの谷合いに吉野川が細長い平野をひらき、国道の両側に農地と集落が点在している。総面積57.93km²のうち9割以上を森林が占め、古くから木材生産や造林事業が盛んな地域であった。昭和と平成の大合併に参加せず、あえて「村」として生きる道を選び取り、自主・自立を目指したむらづくりを進めている。

● 基本は森林資源量の把握

村の中心部、清流・吉野川と並行して走る国道沿いにしゃれた木造の建物が目に入った。令和3年6月に全面オープンした村の拠点施設「あわくら会館」（役場庁舎、図書館等）である。建物に入ったとたん心地よい木の香りに包まれた。村産材を存分に使い、村内企業で加工された家具や什器を配置し、空調には地域熱供給システムが施されている。村が平成20年に掲げた「百年の森林構想」理念の一つの結実ともいえる施設である。

平成の大合併のうねりの中で、単独自立の道を選んだ西栗倉村は、村民が子や孫のためにと育ててきた木々を地域最大の資源ととらえ、村ぐるみで100年の森林に育てようと「百年の森林構想」を掲げた。「村の森林の84%がスギの人工林です。昭和30年代に造林が盛んに行われ、50年生のスギが育っていたのですが、適切な管理ができていませんでした。そこで、村がこれらを預かり良質な木に育てると同時に、村内に木材加工などの起業を促進させ、雇用創出や定住を目指しました」と説明してくれたのは、構想策定時から事業に携わっている西栗倉村・地方創生特任参事の上山隆浩さん。村が森林の個人所有者と「長期施業管理契約」を結んで10年間預かって森林管理や整備を行い、民間会社が間伐材を使用した商品開発やマーケティングを行うものだが、まず行ったのは、森林のレーザー航測や地図の管理。「測量の結果、木の高さ、太さ



図書館（あわくら会館）

などの蓄積量や地質など、森林資源の詳細を把握してデータ化することができました。資源規模がわからなければ事業の持続は困難ですし、融資を受けることもできませんから」と上山さん。

徹底した資源の把握と管理もあり、西栗倉村は都市部から投資を呼び込むことに成功する。令和2年8月、国内初となる民間資本による「森林信託」システムの導入が実現したのである。信託銀行は村の契約と同様に、所有者に代わり、林業事業体への経営の委託、収入の管理などを行い、間伐収益などによる配当も行う。

「地方の役場が森林を所有する『村外地主』に対応するには時間とコストがかかりますが、信託銀行であれば所有者や受益者との連絡はスムーズですし、相続の際に未登記のままになるようなこともなくなります」と上山さん。現在、村は個人所有の森林対象面積の約半分を管理しており、今後も信託銀行の参入による管理面積のさらなる拡大が期待される。

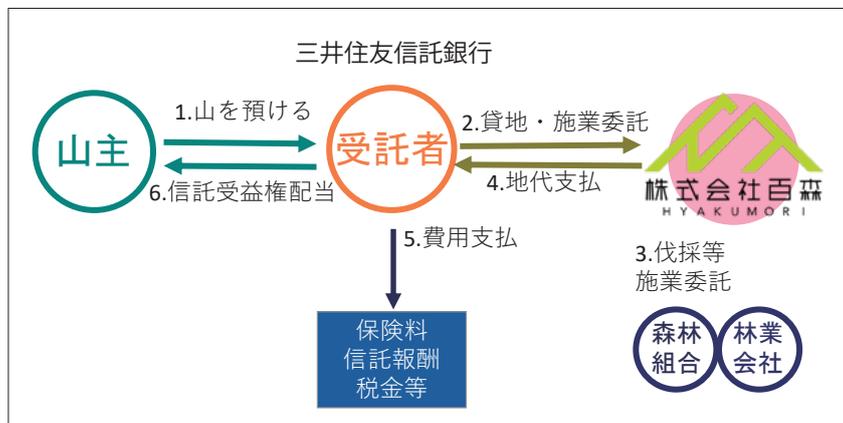


● 森林価値を高める事業の数々

これまで森林管理・整備の業務等は、地域の森林組合が担っており、行政は組合へ補助金を出すことで林業支援を行ってきた。しかし、行政の役割はそれだけではないと上山さんは言う。「行政は、地域の自然資本価値を上げるのが仕事。環境林を作って観光拠点にしたり、バイオマス事業を展開するなどして、森林の価値を向上させなければ」。

一方、切り出した間伐材はすべて村内で管理している。あるものは家具などの商品となり、あるものは合板として販売され、使えないものはバイオマス燃料となる。市場に出せば1億円にしかならない木材が、加工することで十数倍もの価値を生み、そこに従事する雇用者が多くなれば地域は潤う。林業からの枝葉の事業が多ければ多いほど、森林価値は高まるのだ。

また西粟倉村では、平成23年から森林事業における脱炭素への取り組みを開始した。森林の適切な管理により植栽・保育・間伐を実施すると、CO₂の吸収量は増加する。加えて、昭和41年に設置した小水力発電所をリプレイスしたところ、折しも平成24年7月に開始されたFIT制度（固定価格買取制度）により有利な売電が可能となり、これを資金として脱炭素事業は加速した。村内にある3つの温泉施設も灯油ボイラーから薪ボイラーに更新し、木質バイオマス事業も展開。これらを管理する専門の会社もできた。「バイオマスや薪に変更すると、人力で熱を管理

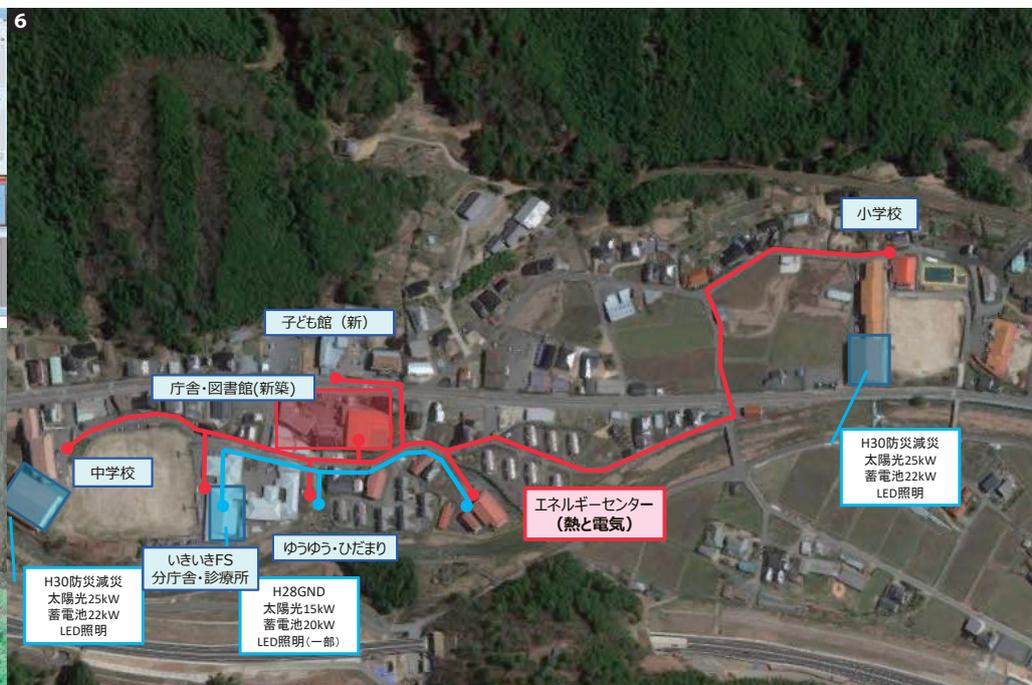
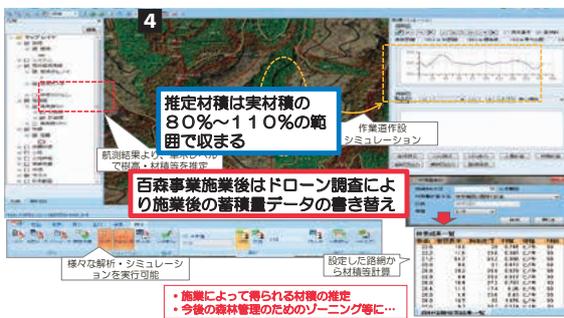


森林信託のしくみ

森林信託は、山林の所有権を信託銀行がもち、山の所有者は「信託受益権」を取得し配当がもらえ、所有権は信託契約満了後に返還される。森林整備費用等の金銭的負担はなく、相続手続きが簡単になる。

してエネルギーをつくらなければならないので、施設従業員からは不満が出ます。そこで、薪やボイラーの管理を行い、メーターで熱量を測り、『熱』を売るシステムを導入した会社が起業しました」。企業は少ない量で熱効率を上げることで、より利益を得ることができる。その応用で木質チップを利用した地域熱供給システムを整備し、介護施設等にはガス化発電施設を導入、停電時にも熱供給が継続できるように対応している。

時代の追い風も吹いた。都市部より地方での生活に魅力を感じ、西粟倉村の活動に関心をもつ若者が増え、1ターンや地域おこし協力隊の応募も多くなってきた。平成27年からは地方創生推進交付金を活用したローカルベンチャー事業が大きく前進した。令和4年現在、地域おこし協力隊（現職）は42人、起業した会社は50社にのぼっている。



立ち上がったローカルベンチャー企業(1) (株)西粟倉・森の学校 2 木工房ようび(YOUBI) 3 (株)木の里工房木薫) 4 レーザー航測により森林のデータを定量化し、平成28年度には資源量を把握するため森林解析情報システムを導入した。5 百年の森林協同組合 6 地域熱供給システム。赤線が熱導管、青線が電気自営線。7 村内温泉3施設の薪ボイラーの管理も会社が行っている。8 あわくら会館は、森林経営に始まり木材生産、木材流通や木製品・木製家具デザイン等事業者など、地域の業者が協働して建てられた木造庁舎及び多目的交流施設。令和3年度「木材利用優良施設コンクール」において最高位の「内閣総理大臣賞」を受賞した。





(株)百森は平成29年10月に設立。令和元年度から役場に代わり「百年の森林構想」の事業主体を担っている。

● 持続可能な“行政”の事業を実現

「百年の森林構想」により、村はどう変わったか。令和4年3月現在の高齢化率は37.24%。県内の中山間地域や合併をした自治体より数字が抑えられている。その要因は起業・移住によるIターンの増加で、人口の16%に及んでいる。人口減少のペースはゆるやかとなり、子どもの数は増加して令和4年4月現在の15歳以下の人口は約190人を数える。

起業は林業関連だけでなく、教育、介護、研究所、ソーシャル系ビジネスなど、各種分野にまたがるものとなった。そこで村は「百年の森林構想」から一步先に踏み出し、「生きるを楽しむ」をキャッチコピーに掲げ、誰一人取り残さない新たな地方創生を目標に据えた。

首長や担当者が代わると事業の継続が難しいことがままあるが、西粟倉村では平成29年、構想の基本となる森林の集約化と経営管理を行う会社「(株)百森」を立ち上げ、事業を民間に承継することで、その継続性をシステムとして担保した。また、ビジネス支援、加工業、エネルギー分野などの事業にもすべて民間企業が携わっており、役場は森林所有者との契約関連業務や資金調達支援などの役割を担うだけで、「百年の森林構想」事業の継続は確固たるものになっている。「民間企業は行政と違い、村だけでなく他の地域で事業を展開できる強みがあります」と語る上山さんは、今後の事業展開の鍵を「情報の集

約化と提供」と考え、こう続ける。「電波の届かない山の中でも位置情報や山の情報を確認し、チャットもできるアプリを構築するほか、『デジタル田園都市国家構想推進交付金』を活用して、これまでに蓄積してきた森林データや村のデータカタログを公開するためのデータ連携及び通信基盤整備を計画しています。題して“モリリズムプロジェクト”です。事業には、村内で教育・観光・林業を実施している複数事業者が参画し、それぞれの専門領域でデータ連携基盤を利用する新規サービスを開発・実装する。「森とひとつになり、心身のリズムを整えることを“モリリズム”と表現し、将来的には、森の中にいるときの体の変化などのデータが蓄積できるとよいと考えています」。

有益なデータが集積している強みを生かし、西粟倉村をフィールドとした研究者や企業を受け入れるための受け皿として一般財団法人も立ち上げた。西粟倉村にビジネスの可能性を見出す人々との交流の場として、宿泊交流施設の整備も進める一方で、林業に不適な土地の価値をどう上げるかを課題として捉え、新たなビジネスモデルを検討している。

緑なす豊かな森林は一朝一夕には育たない。環境、脱炭素、持続可能な社会の構築に向けて取り組む行政の事業も同様だ。それを達成するのは、中長期の展望とそれを堅固に支える思想とシステム、そして人材であることを、西粟倉村の「百年の森林構想」の取り組みが示している。

【取材・写真協力 西粟倉村地方創生推進室】



株式会社 ONE TABLE との連携による宿泊交流施設整備の完成予想図